堀越千秋　壁画制作

熊本　ドミンゴ

熊本日日新聞 16th. SEP.2000

日日新聞　平成12年(2000年)9月16日　土曜日

スペイン在住の画家 堀越千秋さん

ゆったりと時を楽しむ

熊本市の飲食店に壁画描く

スペイン在住の画家堀越千秋さん(51)がこのほど来熊、熊本市花畑町にあるスペイン風飲食店の開店を記念し、店内外の壁画を描いた。堀越さんは現在、本紙連載小説「遠ざかる祖国」の挿絵を担当。エッセイスト、フラメンコの歌い手でもある。来熊を機に、ゆったりと人生を楽しむ堀越さんの生き方を聞いた。

闘牛士、地中海、サボテン 踊るように軽やかな線

スペイン風飲食店の壁画を描く画家堀越千秋さん＝熊本市花畑町の「DOMINGO」

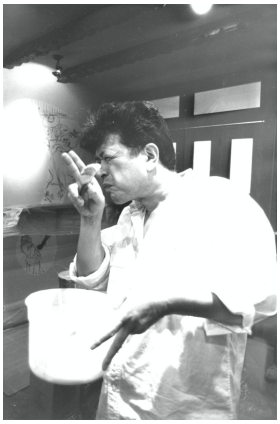
堀越さんは東京芸大大学院在学中、「絵かきになるならパリ」と考えフランスに行ったが、「ここは違う」と直感。イタリア経由で行き着いた先がスペインだったという。「ピカソの勢い、短気、粗放さにあこがれた。スペインにはそれがあった」。大学院修了後、スペイン政府の給費留学生として再渡航した。

夜間に国立の美術学校でリトグラフを学び、昼間はアトリエで人体や抽象画をひたすら描き続けた。一年分の給付金で二年間食いつないだ後、親からの仕送りを受け卒業。渡航後六年目に東京で開いた初個展で「念願の絵かき」としてデビューした。

マドリード在住二十四年。二年に一回のペースでスペイン各地や東京、ソウルなどで個展を開いている。パリのビルロビーに壁画を描いたこともある。三十五歳の時、日本から絵の勉強に来ていた五歳年下の妻と出会い、結婚。「高一と小五の娘二人はマドリードで生まれた二世ですよ」とうれしそうに目を細める。スペイン好きは筋金入りだ。

今回、友人の飲食店経営岡田信之さん(四七)が、全国でも珍しいスペインバル（カウンター式立ち飲み屋）を開くのを祝うために来熊。岡田さんの「スペインともっとかかわりたい」という熱烈な思いにこたえ、堀越さんは若い闘牛士をペンキで描いた。サボテン、地中海、フラメンコを舞う男女、角を付けた雄牛…。強弱のある線は、踊るように軽やかだ。内壁のれんが色は堀越さんが提案。「洞くつとか母親の胎内にいるようで、何だか落ち着くでしょう」

堀越さんが挿絵を担当している新聞小説を執筆中の作家逢坂剛さんも大のスペイン好き。二人連れ立って旅行したこともあるという。自身もエッセイを書く。「絵はアトリエで昼間に、文章は夜中に自宅で書きます。友人に手紙を書くのに似ているかもしれない」と堀越さん。

マドリード市在住だが、「本当は南部のアンダルシア地方が一番好き」という。スペインに来て間もないころ、アンダルシアでフラメンコの歌カンテを聞き、魅力に取りつかれた。ギターと手拍子で歌う哀愁を帯びた旋律。このときは「子どもの名付け親になるほど」親しくなった。ジプシー民謡とも言うべきカンテも見よう見まねで覚え、ついにはCD「望郷のソレア」を出した。珍しい東洋人のカンテ歌手だ。

「仕事はマドリード、息抜きはアンダルシア」と、生活を楽しみながら多彩な才能を発揮する堀越さん。スペインのどこに魅了されるのだろう。「ピカソのような芸術家を生む風土と親しみやすさ、でしょうか。日本人の僕の中の半分が、ピカソのようにくせのあるスペイン人の中の半分とうまくかみ合っている。時間の流れがゆったりしているのも好きなんです」と、人なつっこい笑顔を見せた。